【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和５年度学校評価 結果・学校関係者評価

様式１（小・中）

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	小城市立晴田小学校

1　前年度 評価結果の概要	これまでの取組や本校のよさを生かし、さらに以下のことを改善・充実していく。 ・児童が安心して過ごすことができる関係性や環境の構築。 ・児童が「分かった」「できた」を実感できる授業の実践。（働き方改革に基づく教材研究・児童理解等の充実） ・自分のよさを発揮し活躍できる各種体験活動や地域連携の充実。
2　学校教育目標	「心晴れ晴れ　たくましく　学び伸びゆく　晴田っ子」の育成　―つながりあおう！地域に根ざそう！―
3　本年度の重点目標	本校で長年受け継いできた「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」の理念を活かしながら、「自分の命・心はひとつ、友達の命・心もひとつ」を合言葉に、自他とつながり合い、自分や友達（他者）を大切にし行動できる児童を育成するために、児童の自己有用感と自己肯定感（自尊感情）を育む。 全体成果指標：「自分にはよいところがある」と肯定的な回答をしている児童80%以上。

4　重点取組内容・成果指標　　5　最終評価

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践	○学力向上対策評価シートを受けて作成した、個人の具体的取り組みを達成した教師80%以上。	・県が示したPDCAサイクルにのっとって、各職員が個人の具体的な取り組みを確実に実施できるように、学力向上Coがコーディネートを行う。 ・学力向上対策評価シートと学校評価等との関連（整合性）を図るようにする。	A	・学力向上対策評価シートを受けて作成した、個人の具体的取り組みを達成できた教師は95%であった。全職員で学習状況調査等の分析や取り組みの見直しを行い、実践を深められた結果だと考えられる。	学力向上Co 教務主任 研究主任
	○学習規律や学び方についての共通実践	○「学びの6か条」の実施について肯定的な回答をしている児童と職員85%以上。	・毎週末、各クラスで「学びの6か条」を振り返り、委員会活動（運営委員会）で各学年の達成状況を紹介する場を設定する。 ・自学を家庭学習とし、優れているものを南側階段にクラス毎に掲示する。 ・晴田小スタンダードを徹底し、学習環境の整備を行う。	A	・「学びの6か条」に関わるアンケートでは児童86%、職員95%が肯定的な回答をしている。特に、返事、話の聞き方、教え合いについては90%以上の児童ができていると回答しており、「学びの6か条」の共通理解と共通実践ができていると考えられる。自分の考えを伝えようとしている児童が目標を下回っているので、校内研と絡めて児童が自分の考えを伝え合うことができるような手立てを考えなければならない。	学びづくり部 学力向上Co
	○読書活動の推進	○年間100冊以上図書館で本を借りた児童の割合80%以上。	・図書館祭り，委員会活動，読み聞かせ活動，目標冊数設定等により，読書活動を推進する。	B	・1月18日の時点で100冊以上本を借りている児童の割合は約63%であった。学年別の内訳は、1年生86%、2年生91%、3年生56%、4年生91%、5年生28%、6年生38%であった。授業時間内に図書の時間を確保することの難しい高学年で借りている割合が少ないことが分かった。高学年で目標とする読書量を見直すとともに、読書に親しむ工夫をしていく必要がある。	
	○算数科における交流活動の充実（校内研究の充実）	○「あいあいタイム」（交流活動）の実施や効果について肯定的な回答をしている児童と職員85%以上。 ○一人一台端末の活用について肯定的な回答をしている児童（高学年）と職員80%以上。	・授業の中で様々な形のあいあいタイムを仕組み、自分の考えを持たせる。双方向のやりとりをしながら、考えを言語化させることで理解を深める。 ・一つの単元の中で、一人一台端末を活用する学習を仕組む。 ・校内研の中で、ICTを活用した実践を紹介し合う時間を設ける。	A	・算数アンケートの結果、あいあいタイムの実施について肯定的な回答をしている児童73%だった。一方、あいあいタイムをしたことで分かったと思ったことがあると回答した児童は90%で学年が上がるにつれて肯定的な回答が増えた。高学年に上がるにつれて、学習内容が難しくり苦手意識を感じているからこそ、あいあいタイムで分かったときの喜びが大きいと考えられる。	研究主任
●心の教育	●児童が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」を実践することに肯定的な回答をしている児童85%以上。 ○「自分にはよいところがある」と肯定的な回答をしている児童80%以上。（全体指標と同様）	・「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」「いのち・心は一つ」の合言葉を集会活動等で呼びかけ、教育活動の土台とする。 ・人権フェスタ（授業参観）を開催し、全学級で人権学習の実施。 ・2月にいのちを考える週間を設定し、集会活動の実施、養護教諭や助産師からの授業等を実施を通して、命の大切さについて改めて考える。 ・係活動と連携し、「人権守り隊」を募り、人権集会の進行や校内人権標語コンクール等を実施する。	B	・「聴くは思いやり　言葉はおくりもの」を実践することについて全校児童の92%が肯定的な回答をしていた。中間評価までの取り組みを継続したことに加え、いじめ防止標語の作成に全校で取り組んだことが効果的であった。 ・「自分にはよいところがある」について肯定的な回答をした児童が83%であった。肯定的な回答が80%を下回る学年もあったため、学級、学年、全校での取り組みをさらに充実させ、児童同士でいいところ見つけたり、職員が児童のいいところを伝えていく機会を増やしていくことが必要である。	人権・同和教育 教育相談 生徒指導主任 特支Co 特別活動
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめ防止のための取組、事案対処等）について組織的な対応ができていると回答した職員85%以上。	・毎月1回の「月の心」アンケート及び年2回（6月11月）の教育相談週間等を行い，教育相談を充実させることでいじめの早期発見に努める。 ・ケース会議を適宜開催し，チームで対応すると共にSCやSSW等との連携を図る。 ・いじめに関する研修会を開き，いじめの未然防止・早期発見等への職員の対応力を高める。 ・いじめ防止対策委員会でのご意見を校内での取組に反映させる。	A	いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止のための取組、事案対処等）について組織的な対応ができていることについて、全職員が肯定的な回答をしていた。中間評価までの取り組みを継続することで、児童の悩み等を把握することで、早期対応をすることができた。また、ケース会議を適宜開くとともに、SCやSSW等との連携を図ることで、チームとして、対応することができた。	教育相談 生徒指導主任 特支Co
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれると思う」と回答した児童80%以上。 ●◎「将来の夢や希望を持っている」について肯定的な回答をした児童80%以上。	・学級での係活動や、学校行事などに際しての実行委員などを活性化させ、活動に対して振り帰りを行い、承認する場を積極的に設定する。 ・学期初め、終わりなどのキャリアパスポートの活用に加え、行事などに対してどんなためてをもって参加するかを明確化させ、振り返りを行わせる。 ・縦割り班活動を中心に、異学年との交流の中で互いの良いところを見つけられるようにする。	A	・「先生はあなたのよいところを認めてくれると思う」と回答した児童は80%であった。学級での授業中のみならず、係活動などの特別活動、行事の実行委員,など、児童が活躍することができる場を今後も積極的に設定していきたい。 ・自分の夢に向かって努力をしている児童は87.9%であった。学習やその他の活動での振り返りを適宜行い、自分の成長や伸びに気付くことができる機会を設定することの重要性を改めて実感した。	特活主任 担任 教務 総合学習主任
	○登校不安がある児童に対する取組の充実	○登校不安を抱える児童への対応がチームとして取り組めているという職員の回答85%以上。	・「月の心」アンケート、「教育相談週間」の実施に加え，県の「不登校対策チェックシート」活用による，早期発見・早期対応に努める。 ・ケース会議の実施によるチームでの対応，SC・SSW他各関係機関との積極的な連携を行う。	A	登校不安を抱える児童への対応がチームとして取り組めていることについて、職員の95%が肯定的な回答をしていた。登校不安を抱える児童について、全職員で情報を共有することができた。また、ケース会議を開き、SC、SSWやSSF等の関係機関と積極的に連携を図り、いつ、誰が、何をするのかを明確にしながら、対応をすることができた。	教育相談 生徒指導
●健康・体つくり	❷「望ましい生活習慣の形成」	○徒歩登校について肯定的な回答をしている児童90%以上。 ○あいさつについて肯定的な回答をしている児童90%以上。	・月2回の徒歩登校チェックとアンケート調査を行い、徒歩登校を奨励する。 ・運営委員会を中心とし、代表委員会の議題としてあいさつを取り上げ、学校全体で取組を考え、児童主体の活動を促していく。	A	・徒歩登校調査について肯定的な回答をしている児童は89%であった。歩いて登校している児童とそうでない児童が固定化しているので、歩いて登校するよさなどについて様々な方法で知らせる方法を考えていきたい。 ・あいさつについて肯定的な回答をしている児童は90.9%であった。年度当初に比べ、あいさつの声が大きくなってきたように感じる。来年度以降も、児童の声をもとに、明るい学校にするための方法を模索していく。	仲間づくり部
	❸「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「健康に良い食事をしている」児童80%以上。	・晴田っ子アンケートによる朝食喫食率の把握。向上に向け、給食委員会を中心に朝食の大切さについての呼びかけ。 ・学活や家庭科等で、健康によい食事について考える時間を設ける。	A	・毎朝朝食を食べて登校している児童は83%であった。毎日の給食の放送や給食委員会を中心とした活動を通して、食の大切さを呼びかけることができた。給食週間では食に対して興味を持つ児童が増えるようにアンケートの実施やクイズなど様々な取り組みを行なった。今後も児童が楽しみながら食について学べる機会を増やしていきたい。	食育担当 給食指導担当
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時外在校時間の上限を順守する。	・晴田小働き方の（5）か条の見直し更新を行う。 ・毎月の時間外在校時間の省察を行う。 ・定時退勤日（ハッピーデーの推進）毎週金曜日18時00分を実施する。 ・3つくり部＋特別支援教育部によるチーム制の充実を図る。 ・毎週木曜日の学年部会の効果的な運用を行う。	A	・時間外在校時間の平均時間が33.3時間で45時間を下回っており、昨年度比-4.6時間となっている。（令和5年12月末時点）	教頭 教務主任

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	
○地域連携	○地域住民（青少健・育友会）や保護者と連携した教育課程等の実践	○「学校は地域住民や保護者と連携した体験活動・育友会活動に取り組んでいる」と肯定的な回答をした保護者・職員の割合90%以上。 ○地域や地域人材活用した学習に楽しさややりがいを感じている児童90%以上。	・計画書や人材バンク表等を用い総合的な学習の時間や生活科等における地域の教育資源や人財の積極的な活用を行う。 ・土曜教室等への参加（年2回程度）により職員の地域理解の促進を図る。 ・育友会専門部や学年役員等と連携を図る。 ・生活科や総合的な学習の時間を中心に，地域との連携を図り自己有用感育成を視点にもった単元構成や教育実践を行う。	A	・学校評価に係るアンケート結果より、職員「育友会や地域と連携したり、活動に参加したりすることができた」100%、保護者「学校は地域住民や保護者と連携した体験活動・育友会活動に取り組んでいる」100%、児童「地域の人と一緒に活動するのは楽しい」95%が、肯定的な回答（そう思う・どちらかといえばそう思う）と回答をしている。	教頭 教務主任 総合・生活科担当
○特別支援教育の充実	○子どもの特性を考慮した環境整備（人的・物的）	○特別支援学級在籍の保護者が「個に応じた指導・支援を受けている」と肯定的な回答をした割合90%以上。 ○特別支援教育に関する理解や連携が深まったことに肯定的な回答をしている職員90%以上。	・特別支援教育に関わる企画・運営を特別支援教育部のチーム力を発揮し、校内支援体制を充実させる。 ・交流学級担任と特別支援学級担任の協働・連携を促進し、支援の充実を図る。 ・児童理解・児童支援のための取り組みとして、計画的に職員への特別支援研修会やケース会を実施する。 ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業についての共通理解や振り返りを行う。	A	・特別支援学級の保護者が「個に応じた指導・支援を受けている」と回答をした割合は91%で、ほとんどが肯定的な回答であった。交流学級担任と特別支援学級担任、管理職、級外.が情報交換を行いながら支援にあたったり、ケース会を開いたりすることによって、支援を充実させることができた。 ・全職員から「落ち着いて過ごせるように環境整備に努めている」と、回答を得ることができた。ユニバーサルデザイン教育についての共通理解やアンガーマネジメント研修会を実施し理解を深めることができた。チームで特別支援教育の運営にあたることで、充実させることができた。	特支Co 学びづくり部 学力向上Co

●・・・県共通　○・・・学校独自　◎・・・志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	全体成果指標「自分にはよいところがある」については、全体で83%となり指標を上回った。しかしながら、学年によっては指標を下回っている学年があること、学年が上がるにつ入れて肯定的な回答が減る傾向にあること（1年95%　2年83%　3年72%　4年92%　5年80%　6年73%）等が課題としてあげられる。このことから、令和6年度も、自他とつながり合い、自分や友達（他者）を大切にし行動できる児童を育成するために、児童の自己有用感と自己肯定感（自尊感情）を育むことを引き続き目指していきたい。また、地域との連携をさらに深め、晴田を大事にする心情や将来の人材育成に努めていきたい。